続するという国の方針です。われわれとしては、この国際中国学研究センターの諸事業をグローバルＣＯＥにつなげていくように努力をしたいと考えています。その意味で、皆さま方のさまざまなご支援をいただければ幸いです。

どうもご清聴いただきありがとうございました。

◆◆◆◆◆

●司会―　それでは早速今回の国際シンポジウムの趣旨説明へ移らせていただきたいと思います。なお、本日の司会は、本ＣＯＥプログラムの事務局長をしております、私、愛知大学の現代中国学部の山本一巳が務めさせていただきます。よろしくお願いします。

では、本学、国際中国学研究センター所長で、本ＣＯＥプログラムの拠点リーダーであります現代中国学部教授加々美光行より本シンポジウムの趣旨を説明させていただきます。

◆趣旨説明◆

加々美 光行
＜愛知大学／ＣＯＥ拠点リーダー＞

おはようございます。まだ５年経っていませんが、４年と７、８カ月の間、ＣＯＥをずっとやってきました。今年が最終年度にあたります。第一期ＣＯＥの期限は５年ですから、来年の３月末で、このプロジェクト第一期目が終了します。ずいぶん長い道のりをやってきたという思いがします。その意味では今日は非常にうれしくて、心のなかは、半分は心配ですが半分は晴れ晴れとしています。この山を一つ越えれば、また次の山がくるかもしれませんが、取りあえず少し頂上が見えるという気持ちでいっぱいです。

2002 年に、文部科学省のＣＯＥプログラムの認可を受けてスタートした際、ちょうどイラク戦争が始まる年でした。2001 年の９・11、ニューヨーク世界貿易センターが民間飛行機の自爆テロによって爆破されました。ご存じのように、翌年、ついに先制攻撃論に基づくアメリカのイラク戦争への道が出発します。そうした緊張に満ちたなかで、このＣＯＥはスタートしました。

もちろん中国学ということを課題としてスタートしているわけですが、中国学はご存じのように、過去、地域研究（エリアスタディ）と呼ばれた分野のなかの代表選手でした。これは戦後、フェアバンク（John K. Fairbank)、ドン・マッケイ（Don McKey）などのハーバードグループがアメリカでエリアスタディという学問分野を立ち上げて以来、フェアバンクはご存じのように中国学の大御所でもありますので、当然、地域研究のなかでは中国研究、中国学というものが中心的な位置を占めてきたわけです。

私は、愛知大学に 1991 年に赴任しましたが、それまでの 24 年間はアジア経済研究所で地域

研究をやってきました。ですから、私の同僚にはたくさんのアフリカ研究者もいれば、ラテンアメリカ研究者もいますし中東研究者もいます。中東研究者、イラクの研究者としては有名な酒井啓子さんという女性の研究者がいます。彼女は私と同じ研究室で研究した仲間です。

地域研究全体に広がる根本的な問題、これでいいのかという疑問、それは私がアジア経済研究所に 1967 年に入って以来、一貫して抱いてきた疑問です。そこに重大な方法論的問題がありはしないかと。とりわけて、それが隣国である中国や韓国の問題になると、それは方法論的な研究方法上のゆがみが直接東アジア国際政治、あるいは日本の外交や安全保障、さらには国内的な政策に大きな影響を及ぼすという思いが強くありました。

地域研究の最大の問題は、「観察学」というウォッチング的な方法が非常に支配的であるということです。つまり、欧米の文化や思想、あるいはものの思考様式と、発展途上諸国、当時は後進国（underdeveloped countries）と言われましたが、そのような国々の文化、もう少し大きく言えば文明です。それが完ぺきに異質であると。異質であるところには対話は成り立ちません。対話という方法をどこかでむしろ無視して、対話をしないわけですから、当然ウォッチングという方法が採られていくという問題がここにはあるわけです。これが第一点です。

それからもう一点は、実は古典のアジア、例えば、中近東地域。これは四大文明、古代文明の発祥地として非常に興味を持ち、かつ、むしろ肯定的な姿勢を持って研究されます。しかし、中国も含めて同時代のアジア、アフリカ、ラテンアメリカのような諸国に対しては、どこか上から下に見るというか、上からものを見るというか、そのような姿勢が濃厚に表れています。これが通例、よくあるサイード（E.W. Said）よって提起された「オリエンタリズム」、中国語では「東方主義」と訳されますが、厳密な意味でいえば「西洋中心主義」ということです。そのようなオリエンタリズムというのが長く支配してきました。

私は 1967 年から地域研究を始めましたが、こうした弊害は何も 1967 年に始まったものではなく、もっと過去にさかのぼり非常に根深い要素を持っています。簡単に言うと、西欧諸国同士では対話をします。文明的な意味での対等性というものがあります。文明的な意味での対等性があるゆえに対話によって文化交流がなされ、また学問交流がなされます。しかし、アジアやアフリカには対等な文明は存在しないという、あるいはその前提にまず文明的に異質であるという、異質であるがゆえに対話を必要としないという考え方が、この方法論のなかに非常に根深くありました。

ウォッチングの方法は、つまりバードウォッチングを見てみればわかりますように、相手になるべく触らないで外から観察するというわけです。本当に外からただ観察するだけであれば構わないのですが、これが実態としては、日本を含む欧米諸国の外交戦略や国際政治戦略に大きく影響を及ぼしていきます。つまり、やはり内容的には単なる観察に終わらない要素があるわけです。そこに先ほど言ったように、上から下にながめるという姿勢が非常に濃厚にあるわけです。

一般には社会科学、人文科学、どの科学もそうですが、それは科学という名前で呼ばれる以上、自然科学と同様に、自然科学のすべての分野をご覧になればわかるように、自然という、あるいは自然環境といわれる研究の対象を何らかのかたちで変えていきます。もちろん意図的には良いほうに変えていきます。別の言い方をすれば、改革するということです。自然を人間にとって非常に都合の良いように向けて変えていきます。これが自然科学が抱えていた問題ですし、そこにまた、科学と技術というものが並べていわれるようになる、そういう根本的な理

由もあります。技術は、つまり人工的な、人為的な操作を加えるということが技術の基本ですから、そういうものを自然科学というものが生み出していったということがあります。それをまねて社会科学ができました。人文科学も科学と銘打つ以上、それをまねて科学として成立してきましたので、同じく研究対象に人為的な加工を加えます。つまり人為的な操作を加えるという意図が、そこに含まれてくるわけです。具体的な地域研究では、人間にとって都合の良いようにということですから、ここでは地域研究は欧米の世界にとって都合の良いように、アジア・アフリカ、当時の言葉で言えば途上国を人為的に変えていくという意図が、実は方法論的に明確にされないままずっととられてきたわけです。

その場合、もう一つ重大な問題は、科学は対象と、つまり実験室で自然のある部分を取り出して人為的な操作を加えます。実験とはそういうものです。そのときに、対象となっている自然から切り取った切片、これが研究者のほうに影響し、反作用を及ぼしてくることを遮断するわけです。実験室というのはそうなっています。

一方向的な研究者から研究対象に向かって、つまり自然科学でいえば、自然科学者から研究室にある自然の切片である研究対象に向かって一方向的に操作が加えられるわけです。決して双方向的ではありません。

これと同じ弊害が地域研究にも現れます。地域研究は、例えば研究者が対象である中国に、一方向的な操作を加えようとする意図が働くわけです。そのときにより良い方向にというのが科学の基本だと申しました。より良いというのは、誰にとってより良いかということになってきます。自然科学の場合は人間にとってということですが、地域研究にとっては地域研究者が属する世界、つまり欧米、日本の世界にとって都合の良いように変えていくという価値観が持ち込まれてしまうわけです。このようなことを非常に長く、このようなことでいいのか、と私は感じてきたのはその点にあるわけです。

オリエンタリズムについて、サイードやコーエン（Paul.A. Cohen）がさまざまな議論をしました。もうそれから既に30年近い歳月が過ぎようとしていますが、このオリエンタリズムは理論のうえでは解決されたことになっています。しかし、実態としての研究世界から、このゆがんだ方法というものが果たして克服されたかというと、私には到底そう思えません。実はそれが、2002年に現代中国学というものをめぐって、私がＣＯＥに申請をお願いした根本的な理由です。

少し言い落としました。繰り返しますが、例えばシルクロードの問題、あるいは三国時代の問題、春秋戦国期の英雄の歴史、司馬遷の『史記』の世界、このようなものにはみんな胸を躍らせて一生懸命に、例えば、酒見賢一さんという方が愛大の出身の歴史小説家でおりますけれども、酒見さんの小説は、私の本などと比較にならないくらいです。私の本はせいぜい 3,500部とか5,000部売れたらいいほうですが、酒見さんとなると軽く数万部、10万部売れていきます。どうしてでしょうか。つまり古典古代を話題としたものには、みんな関心があり、それに非常にむしろ肯定的なイメージを持ちます。ところが現代に対してはそうではないという、同時代に対しては非常に否定的であるということ、それゆえに単に「中国学」と言わないで「現代中国学」と銘打っています。

しかし、この二重性は、現代中国に対するゆがんだ姿勢と、古代の中国に対する非常に前向きな姿勢とが不可分な関係にあります。例えば戦前・戦中、東条英機もおそらく間違いなくそうでしょうけれども、漢詩を読むことをよくしました。漢詩を書くことのできる軍人たちはた

くさんいました。特に将軍クラスの軍事指導者はほとんどそういう教養を持っていました。しかし、彼らは同時代の中国人に対しては見下していました。一方では漢詩を楽しみ、杜甫や李白を喜び、しかしまた一方では、同時代の中国人をあれほど低く見るという姿勢は、実は今に始まったことではありません。戦前・戦中の日本の中国侵略の根底にはそのような構造があり、それをもっとさかのぼれば、おそらく明治期からあるわけです。古典古代に対する評価と現代に対する評価は、実は論理的にも、思想的にも、イデオロギー的にも、密接不可分のものであると言わざるを得ません。

このプロジェクトを始めた動機については、以上のように簡単にお話ししました。これを突き崩すためには、研究世界そのものを、欧米、中国、東南アジア、アジア、場合によってはアフリカ、ラテンアメリカも含めて、すべての世界を巻き込んで、その方法論的な革新を目指します。必ずしも私が申し上げていることを、皆さんが納得して、「それは加々美の言うとおりだ」と言って拍手して、「では、そうしましょう」とはいかないことは重々承知しています。

ですから、スタートはむしろ百家争鳴というか、つまり徹底的にそれぞれ違う立場で、この問題をめぐって多くの世界の方々と一緒に討論を進めていきたいと。これが研究事業として、このＣＯＥの一つの柱として目指したものです。同時に若い世代にも受け継いでいってもらわなければならない課題です。このＣＯＥプログラムでは、人材養成の面にも重点を置いています。教学の方法、研究の方法というのは教育と密接につながっています。よく大学の教師のなかで教育と研究は別ですと、だから大学に来たら別にもう研究をやらなくていい、教育だけやりますという先生もおられますし、なかには逆に、大学に来て、教育のほうは大変だから適当に講義をこなして研究に集中してやりましょうと、そういう先生もいます。つまり簡単に言うと教育と研究というのをばらばらに考えて、どちらかに重点をおいて大学教員として自分の任務を果たそうとする先生方が多いのですが、私はまったくそう思っていません。教育というもの、つまり人材養成と研究は一体不可分なものです。私どものＣＯＥでも中国人民大学から５名の博士課程の学生、南開大学から同じく５名の博士課程の学生を選抜して、10 名の合格者に愛知大学の博士課程の学籍を与えています。これを二重学籍と言いますが、二重学籍制度としてこの間ずっと展開してきたわけです。彼らを人材として養成していくときにいかなる教育を施すのか、その教育の根幹に方法論の問題があるわけです。研究上の方法論が違えば、教育上の方法論もそれに応じて変わってきます。これは今の段階では、実は十分に目的が達成されたというところまできていません。研究上の方法論でまだ手いっぱいです。しかもそれの、まだ全体が統一的に合意する方法論というところまで到達していません。ですから教育面でも試行錯誤がまだ続いています。しかし、将来的な課題、私どもが目指す課題は、研究と人材養成、教育と両方とも統一した最低限の合意点を探り出す、その方向性について徹底的に討論していただくということです。

このプロジェクトは来年の３月で終了いたしますが、文部科学省は、次の継続的なＣＯＥを既に計画しています。２月から３月に申請手続が始まります。半分は、今、ＣＯＥをおこなっているプロジェクトをそのまま継続するというか、内容的には決してそのままではありませんが、同じ大学、同じ研究単位が継続して、次のＣＯＥをおこなうということになっています。

問題は、ＣＯＥ全体のプロジェクト数、文部科学省が認可するプロジェクトの数が、第一期の半分になるということです。そのかわりに、一つひとつのプロジェクトのために支出する資金、援助金は倍額になります。つまり、お金は倍額もらえます。ただしプロジェクトの数は半

分に減らされるということです。そして、また５年が続きます。これは、より充実したプロジェクトをおこなわなければならないという要請になるわけです。容易ならざることです。私どもの今の力量で､果たして倍に膨らむプロジェクトをやり抜くことができるかどうか｡しかし、課題はたくさん残されています。そのためには、どうしてもチャレンジをしなければなりません。英語で今回の課題の一番トップに「チャレンジ」となっていますね。課題というのはチャレンジでもあります。私どもは勇気を持って次のＣＯＥにチャレンジし、そして残された課題をさらに追求していくつもりです。ぜひ皆さまの大きな支援をいただきたいと思っています。どうもありがとうございました。